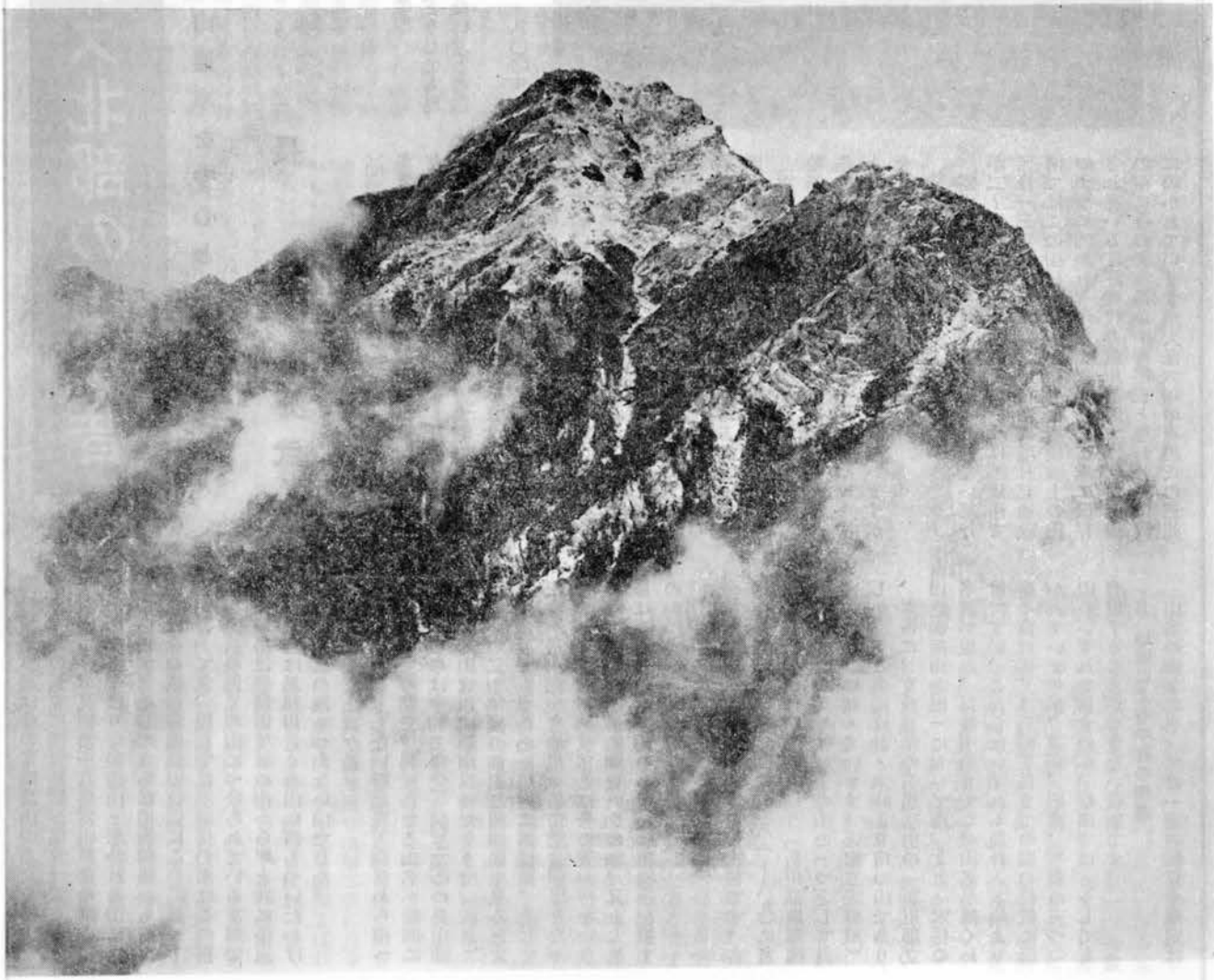
① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日

山と博物館

第13巻　第8号　1968年8月25日　大町山岳博物館



子どもと自然

蟻が東京では二円するという話をきいた。東京のまん中には蟻がいないのであろう。子どもには蟻を見たこともないものがいる。東京にはいわゆる自然がなくなってきた。したがって東京の子どもは自然からは遠く隔離された気の毒な環境におかれている。近代文明・機械文明のせいになっているのである。それを考えると遠く東京とはなれた山国とはいえ、信州の子どもは大きな自然の中に新鮮な空気を吸って公害の騒ぎもなく伸び伸びと育っているということがいえよう。これが一生のこととなると一寸考えさせられる問題もそこに頭をもたげてくるような気がしてならない。

私の幼い頃、少年時代を懐古すると私たちはむしろ自然の中の子どもたちといってもいいだろう。眼がさめるから夜、床につくまで自然の中に生活して大きくなったといってもいいすぎではなかろう。自然の中には子どもたちの友だちが数限りなく年間を通じて提供されていた。花が開けば花にたわむれ、鳥が歌えば共に歌い山に野に原に水に到るところに子どものたのしいくらしがあった。れんげ草の花田は運動場となる。さやえんどうのさやが、麦の茎が笛となる。よしきりの巣を探し、夏が来れば水遊びが始まり、魚とりのたのしさも味い、山の木の技には遊び場がつくられる。秋は秋で、冬は冬で自然への親しみは深い。その間に子どもたちは常に自然のふところの中で自然の生命や神秘性のサムシングにふれていく。こうして子どもたちはその純粋性と素朴性を保ちながら、自然と人間の関係を知らず知らずのうちに感得しつゝ、人間性を豊かにする根基を培ってきた。子どもには観察や採集、又は栽培飼育を通して造化の妙にも触れえて貴い。大人たちのつくる娑婆の一角に頭でっかちになりたがる子どもたちに自然性を復活させることを痛感する。学校も山博のような社会教育機関も、そして家庭教育もいかにして子どもたちを自然と親しませるかは今日、そして明日の大きな課題である。

（元教育長・矢口亨）

北アルプス北部の山今昔（四）

……後立山連峯を中心として……

長沢　武

(1) 古山名について

㈠宙に迷う山名(一)

神明岳、コイ岳、マスガ岳(承前)

古い絵図に載っていながら、どうしても現在の山と結びつけることのできない、この三つの山について、

神明岳は①「信濃国絵図」(一八〇〇年代)②「長野県管内図」(一八七八年)③「信濃地名考」(一七七〇年)④「信濃村名尽」(一八七五年)⑤「信濃国全図」その他に、それ〴〵数少ない山の一つとしてちゃんと大町の西高瀬川入りの奥山の位置に載っています。

しかし①と⑤では屏風岳と烏帽子の間に、②では有明山と烏帽子の間に、③では高瀬川入りで五六(現爺岳)とガキ岳の間に④では有明山と穂高岳の間にあるようにそれ〴〵絵が画かれておりますが、現在のどの山に当るのかはっきりしません。或いは明神岳のことではないかと考えられますが、明神岳は古くから御幣岳と呼ばれている特徴のある山ですので困ってしまいます。

次にマスガ岳なる山名は、前記の①と⑤の絵図に載っており、ケンノフ岳とセイクラベ岳の間に画かれてい、又コイ岳は③にガキ岳と大地ゴクの間の山として画かれていますが全く見当のつかない山です。

③不帰岳

富山側の絵図を見てもはっきりしない部分が二〜三ケ所あります。その一つは不帰岳で元禄一三年(一七〇〇年)の奥山御境目見通絵図ではこの山は鑓ケ嶽の南の国境稜線上の山のように画かれ、現在金沢市立図書館に保存されている江戸時代の新川郡図では、鎗ケ嶽の南に今の天狗岳か中背尾根と思われる位置に画かれていますが天保六年の石黒氏の三州測量図籍以後は今の朱殿坊山のあたりの山となり、その近くに不帰地獄が温泉マーク入りで載ってき、又明治一八年富山県編の富山県管内図でもやはり朱殿坊山と思われる山になっています。そしてさらに明治前後のもの〻中には今の祖母谷地嶽の位置にこの温泉マークが移ってき、現在では不帰岳の名はこの祖母谷温泉の近くの山につけられている次第で、不帰岳は信越国境線の山から年と共に後退し、最後は黒部川近くの山に落ちついたわけで、全く尻の落ちつかない山でした。

④錫杖岳と上犬ケ岳

次にはっきりしない所は現天狗岳から南へ大黒岳までの間で、錫杖岳なる山名が絵図に表われるのは享和二年(一八〇二年)の奥山御境目見通山成川成絵図以後だそうで(注2)それから二十年後の前記三州測図を見ると大蓮花(現鑓ケ岳)から一里南に錫杖嶽、そして上犬ケ岳があって赤黒ケ岳(現大黒岳)となっておりますが、錫杖岳とは今の天狗岳をいうのか、或いは不帰の嶮をいうのか、又上犬ケ岳は不帰の嶮を指すのか或いは唐松岳を指すのかつまびらかでありません。

⑤針ノ木岳

第三に大きな疑問の山は針の木岳です。古図をあさると天明年間(一七八一〜八九)に宮永十左衛門が作製したという「新川郡地理図」に数少ない国境稜線上の山の一つとして針ノ木岳が既に載っています。(第二表参照)

しかし、この山は針ノ木峠より南の山であり、さらに、文政五年の石黒信由の「新川郡立山之御縮山之図」において南、北針ノ木岳の名前が現れ、以後明治までこの山名が続くわけですが、これらはいずれも現針ノ木峠より南の南沢岳又は烏帽子岳までの間の位置に画かれていますが、蓮華、船窪、不動の三つの山のいずれを指すのか、絵図ではどうしても判定することができない状態です。

B 地域による呼称の相違

山名の命名に当っては一定の法則や規定はありません。それ〴〵の生活社会、共同体の中で、何らかのきっかけで生まれた名前が、周囲に広まり、それが後世に伝えられたものと思われます。孤立する山や単純山脈の場合の山名ですと、その山を取り巻く生活共同体圏は広くとも、伝播の障害となるものがないので短時間の中に相互に交流し合い、同化し共通の山名となって受けつがれるのですが、北アルプスのような特殊地域の場合は、山脈の反対側で生まれた山名はお互に交流し、同化し共通の名前となる機会も無いまゝ明治末年頃迄それ〴〵の地域固有の名称として、その小さな社会の中のみにおいて生存し、生き残ってくるわけで、従って一つの山が富山、新潟、長野三県において、三者三様の呼称で呼ばれて来たわけで、それ〴〵の山が各地域においてどんな名前で呼ばれていたかは第二表の通りです。

この表を見る時、一つの山が三県共通の名前を持っているものはほんの二〜三にすぎず大部分のものは全く無関係な名前であること又総体的にみて命名についての傾向は、新潟、長野の場合は山容、地形、現象的な命名が多いのに対し、富山側の命名は宗教的、博物的な命名が多いように思われます。

次に、地域よる呼び名の相違は、こうした山脈の裏表といった大きな地域差による他、同一郡内でも地区により同一の山を違う愛称で呼んでいた例があり、錯誤や紛争の基になっております。

鹿島槍は明治の頃一般には鹿島岳と呼んでいましたが、平村の一部や大町辺では、春季その東壁に雪の消えた岩肌が鶴の雪形を作るところから鶴ケ岳(案)と呼んでいましたし北城方面では背競べ又平村野口辺では鹿島槍と呼んでいました(注3)また文政の頃今の白馬岳を北城方面では両かへの岳といゝ南小谷方面では白馬岳、薬師岳という山は北城方面では今の杓子岳を、南小谷方面では今の大日岳をそう呼んでいた記録が残っております

4図B信濃国全図(部分)

（第五図参照）

C 時代により呼称の変った山

「言葉は生きている」と言われますが、山の名前もそのほとんどが長い年月の間に、呼称が変ったり、昔呼んでいた名前が隣の山へ移ったり、又名付けた頃とは呼び名のしめる範囲が変ったりしています。これらのうち旭岳と鑓ケ岳や不帰岳についてはそのいきさつについて既に述べた通りです。

(イ) 朝 日 岳

富山側の古絵図をみると、一様に現朝日岳と思われる国境稜線の山があぶり岳となっています。ところが現在の恵振岳は国境主稜から派生するいわゆる恵振尾根の中間、朝日小屋の西の一小峯にその名が付けられてい、現在朝日小屋のある平も、昔は恵振平といっていたものが今は朝日平といわれるようになっています。

(ロ) 雪倉岳と鉢ケ岳

この二つの山は古図をみるとどれも現在の山名とは反対の名前がついています。つまり今の雪倉岳が鉢ケ岳で、鉢ケ岳が雪倉岳だったのが、いつの間にか入れ変ってしまったわけです。

(ハ) 乗 鞍 岳

乗鞍岳と呼ばれる山は、いずれも双峯型の山容をし、中央に鞍部を持っているものです私は白馬大池の隣りにあるのっぺりした山をどうして乗鞍岳というのかと疑問を持っていたのですが、たまたま古絵図を見て疑いが解けました。絵図を見ると（第五図参照）昔、乗鞍岳と呼んでいた山は現在よりもはるかに大きなもので、天狗岳を中央に西は今の乗鞍岳から東は一九九〇㍍の三角点のある山の神山一帯までを含めた広大な地域を呼び、今の乗鞍岳を乗鞍の前輪、山の神一帯を後輪と呼んでいました。

(ニ) 大 日 岳

この山は地元では文政七～八年頃、白馬岳又は薬師岳と呼んでいた記録があることは前に述べた通りで、代かき馬の雪形の一つはこの山の東端の、大池へ下る肩の処と、もう一つはこの山と現白馬岳との鞍部に現れるので或いはこの山が昔の人の言った代馬だったのかもしれません。この山が大日岳と呼ばれるようになったのは、一八〇一年、この山頂に大日如来の石像が祠られてからのことで、少なくとも一八三〇年以後です。

(ホ) 白 馬 岳

現在一般には「代かき馬の雪形の現れる山代馬が本当で、古くからシロウマと呼ばれていたが、陸測部五万分の一地図製作に当り、白馬と宛字されそれで今ではハクバと言う人が多くなった」とされています。しかし私の調べた範囲ではどの古文書、古絵図からも「代馬」なる文字は発見できませんでしたがそれと反対に「白馬」なる文字は文政七年（一八一四年）以後数ケ所の記録に見ることができました

この山の場合は訓読みが音読みに呼び方が変ったとみるべきで、明治三〇～四〇年代にこの山から新発見されました高山植物は、シロウマアサツキ、シロウマナズナ、シロウマチドリなど皆シロウマの名前が付いていますが、今ではハクバと言う人が多く、地元でさえ大雪渓尻をバジリと呼び、村名もハクバとなってしまいました。

(ヘ) 天 狗 岳

富山側では一、八〇〇年の初め頃までは今の天狗岳の辺を不帰岳と言っていたことは前に述べた通りです天狗岳という名前が信州側の記録に現れるのは一八八〇年頃からで（注4）文政八年（一八二五年）の地元の絵図では、エボシ嶽と呼んでいます。又富山側の一部の絵図を見ると

江戸時代の一時期新川郡の一部ではこの山を小ニチリ岳とか松川岳と呼んでいたことが解ります。

(ト) 鹿島槍と布引岳

鹿島槍ケ岳は富山側では古くから後立山とよんでいましたが、信州側では第二表に見るように、時代によりいろ〳〵な名前でよばれました。その中で一番古くからよばれ、長く続いた名前はケンノフ岳でした。又この山の南峯から布引岳にかけては、ゆるいカーブを画いているので南峯を乗鞍岳といった時期があり、南峯の東面岩壁から南の稜線にかけて、晩春白布を引掛けたように残雪が溝に残るので、古くからこゝを布引とよんでおりましたが、五万分の一地図製作の折、この山名はずっと南の稜線上の小峯に与えられてしまったのです。

〔図原図中〕（図部分）図絵口済論山、月三年七政文図5第

(チ) 針 の 木 岳

信州側では現針ノ木岳から爺ケ岳までの間の山を総称して、古くからスバリ又は屏風とよび、現針ノ木岳については旗窪の頭とよんでおりました。富山側でも長い間この地域に対しては名前がなかったようです。ただ文政二年の「加越能三州測量図籍」以後の絵図には現針ノ木峠の近く山として「地蔵岳」という山がでてきますが、国境稜線の大山という程の山のようには画いてありません。針の木岳という名前は、明治四三年こゝを縦走した中村清太郎氏一行によって命名されたものです。富山側の古絵図を見ると、享和から文化年代の頃のものは一様に、針ノ木峠の南部の山の総称として針ノ木岳の名前を見、さらに時代が下ってくると南、北針ノ木岳の名前が現れて来ますが、これらの山はいずれも現蓮華岳から不動岳のあたりの位置に画かれているものの今のどの山に該当するかはっきりしません。

（山博調査員）

注3 「後立山連峯縦断記」三枝威之介、中村清太郎、辻本満丸、山岳六年一号、明治四四年七月

注4 「信濃地誌略字引」森田鼎鍋纂、明治十三年三月

博物館だより

雷鳥の人工飼育

昨年度まで低地の博物館で行なったライチョウの人工飼育は、本年度は北アルプス爺ガ岳（二六六九㍍）種池小屋付近で行なっている。

メス親、ヒナを飼育舎に収容して人工餌で飼育する方法で行なっており、現在順調に進行している。低地の気温が低くなる9月中～下旬には低地の博物館に移動する予定である

夏山窓口

上条為人

「上高地行きのバスはどこから出ますか。」登山姿もりりしい若い一人の女性が窓口に顔を出す。

「ここからは出ませんよ。」

「アラ、ここは終点じゃないですか。何でも松本で乗りかえて終点で下車して、バスに乗ればよいと聞いて来たんですが。」

いろいろ尋ねてみると、島々線に乗り間違えて、大町で降ろされたらしい。きわめて威勢よく話しているが、それにしてものんびりしている。電車から降りて窓口へ来るまで、島々か大町かわからなかったとは。

「困ったわ。どうしようかしら。」

困るのはこちらである。接続の時間を調べてやり、合間に山岳博物館の見学をすゝめて引き返してもらう。

そうかと思うと、

「雪渓を登るにはアイゼンが必要でしょうね。お借りするのはありませんか。」

「黒四ダムから尾根伝いに、八方尾根へ回る道はありませんか。」

「黒四ダムから下廊下を通って宇奈月へ出たいんですが。」

などというハイキング姿の女性や若者が問いかける。

「せっかく黒四ダムまで来たついでに、立山へ上って富山へ抜けたいんですが。」

と、真面目に質問する中年の女性がある。

ピクニックか遠足のつもりで無計画に窓口に来たり、地図や行程表だけを頼りに計画をたてたりするのんびりムードは、山登りの現場にも表れているという。すなわち充分な準備や装備もなしに難コースを気楽に選んだり、落石の最も激しい場所に腰を下して悠々と弁当をひろげて食べていたり、ビニールを尻に敷いて雪渓を滑り降りたり、数センチの薄さにとけている雪渓の上を平然と歩いたり、はい松地帯を越えて近道したり、写真を撮るために案内標の向きを変えたり、思わずハラハラする遭難一歩手前といった事例が無数にあるとは、山案内人の話である。これは、ハイヒールで乗鞍山頂を散策し、八方尾根に遊び、秘境黒部の探勝が数時間でできる安易さが生んだムードであろうか。

勿論、綿密な計画と細心の注意や慎重な行動にもとづく、登山相談所の利用も盛んであるが、観光の窓口から見る限り、山登りの大衆化と、安易にレジャーを楽しもうとする傾向化が進んでいることは否定できない。

スイスの例をとるまでもなく、アルプスの大自然が何人にも開放されることは結構なことである。黒四ダムから富山へ抜けたいとの中年婦人の願望も、いよ／＼明後年から実現される段階を迎えている。

すなわち、ダム左岸駅から新丸山駅に登る八二八㍍の地下ケーブルのトンネルは既に貫通し、巻立を待って、単車一三一人乗り連結車九一人乗りの単線釣瓶式ケーブルカーの運転は、明年八月から開始されるという。こうなれば、立山の中腹からの雄大な景観の展望は、人々の心を魅了するであろう。

つづいて、新丸山駅と二の沢駅の間には、一七〇二㍍に及ぶ支柱なしの大ロープウェーが架せられ、七一人乗りのゴンドラが上下することになる。

更に、二の沢駅から室堂ターミナルに至る三五一九㍍の立山トンネルは、立山の直下を貫通して、七二人乗りの専用バス八両が走るというわけである。現在立山トンネルは、三ケ所の破砕帯を突破しつゝ、二の沢側から間組が、室堂側から前田組がおの／＼掘削工事に当り、本年度中に貫通させた上、コンクリート巻立てをすませて、明後年にほ年間八ケ月間にわたる営業の開始を目ざしている。

待望の工事が完了すれば、黒四ダムからの入込客は、海抜一四五五㍍のダム左岸から、立山を通り抜けて、海抜二四二四㍍の高山地帯の室堂まで、労せずして僅かの時間で行けることになる。

室堂から富山までは、現在でもバスと鉄道による中継ができている従って明後年以降は観光の様相が一変して、北陸線や大糸線の太いパイプから流れ出す人波は、黒四ダム立山を通過する細いパイプを通ることになる。

富山県側では目下、八十数万人に及ぶと推定される入込客のために、宿泊施設の増設や道路の改修を急ピッチに進めている。従って大町側でも、東山、仁科三湖、温泉郷等の観光資源を生かした開発が進み、駅や駅前広場の拡張、観光バス路線の開発、宿泊施設の拡充、商店街の整備等が遠からず実現されるにちがいない。

そうなれば、東京や名古屋からの直通列車で上高地行きの迷い子もなくなり、黒四ダムや立山へ来たついでに富山や大町へ抜ける乗降客のために、窓口は転手古舞をするにちがいない。しかもその多忙さが誰にも満足を与え得る充実したものでありたいと願う者は、私一人だけではあるまい。

（大町市観光協会・常務理事）

大町観光協会の窓口

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円(送料共)大町山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不可)

表紙説明

ガスの甲斐駒（栗沢山より）

撮影　堀　勝彦

山と博物館　第13巻第8号
一九六八年　八月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL大町②〇二一一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部
定価　年額　三〇〇円（送料共）